

チェルノブイリの子どもたち



チェルノブイリ子ども基金 NEWS No. 101 2015 年 6 月 20 日発行
郵便振替口座「チェルノブイリ子ども基金」 00160-4-98316

チェルノブイリ 29 周年救援キャンペーン

講演会&チャリティコンサート

「チェルノブイリ・福島 /

保養 - 子どもたちを被ばくから守るとりくみ」

4/24 文京シビック小ホール



鎌仲ひとみさん

印田千裕さん
印田陽介さん



~~~~ 来場者の感想 ~~~~

★今回のテーマ『保養』が、いかに被ばく者にとって重要であり、必要なかを痛感しました。未来を担う子ども達（地域、人類、地球の宝）の内部被ばく量を減らし、健全な肉体と精神を育んでいけるよう大人たちが協力していかなければならないと思いました。原発事故による汚染は生命の危機です。人類、生命体、地球の危機です。先延ばしにできない緊急問題を私達は抱えてしまいました。今やらなければこの先はもうない！くらいの覚悟です。鎌仲さんが話していましたが、政府はやりません。だからこそ市民一人一人が立ち上がり、繋がり、意識を1つにして動くことが求められているのだと強く感じました。良い機会をお与え下さり、感謝申し上げます。（埼玉県 40代 女性）

★昔、チェルノブイリ付近の村から日本へ保養に来た7人の子どもたちが、実家に来たことを思い出し、過去と現実を見つめ直そうと、今回参加しました。私と同年だった子どもたちが今どうしているのか分かりませんが、今、日本の被ばくの可能性のある地域で生きる身として、彼ら、彼女らの人生を私もたどるのでは、と感じています。他人事ではないのです。（東京都 20代 女性）

「保養－子どもたちを被ばくから守る チェルノブイリ・福島」／講演会・チャリティコンサート

4/24文京シビックホールで開催された「チェルノブイリ29周年救援キャンペーン 講演会&チャリティコンサート」に、今年も多くの方に足を運んでいただきました。

今回は「保養－子どもたちを被ばくから守るとりくみ」と題して、鎌仲ひとみさんにご講演を頂きました。講演ではベラルーシや福島の子どもの保養、福島第一原発事故による放射能汚染について、漫画「美味しんぼ」での発言でバッシングを浴びた荒木田さんの話（5～6頁参照）、「放射能は洗えば落ちる」と言いながら、子どもが生まれたら食べ物に気を付けるかも、と言う若い女性の話など多岐にわたりました。また、鎌仲さんが監督された映画『小さき声のカノン―選択する人々』の編集段階でカットされた映像の紹介などもありました。

中でも印象に残ったのは、やはり保養の話でした。汚染された地域に住み、低線量の被ばくを長期に渡って受け続け、内部被ばくが慢性化している子どもには、保養が健康になる有効な手段です。しかし、福島では保養に行ける子どもはまだまだ少数で、一般的に広がっていません。「放射線による健康影響は考えにくい」と宣伝される中で声を出し辛いお母さんもいます。保養を行う草の根のグループが、財政的に持続が難しくなっている話もありました。汚染地に住む全ての子どもが保養を受けられるにはどうすれば良いのか考えさせられました。

印田千裕さん&印田陽介さん 姉弟によるデュオ・コンサートは、美しい二重奏曲にしばし時間を忘れるほどでした。演奏された曲の一つである「ダンクラ: “魔弾の射手”」は、印田さんの説明によると、ドイツの民間伝説で、7発中6発は射手の望むところに必ず命中するが、残りの1発は悪魔の望む箇所へ命中するというお話。放射能のことを想像するような伝説で、美しい音色だけでなく、放射能の怖さを改めて感じる一時でした。

また今年も、このイベントの宣伝から当日まで、多くのボランティアのみなさまにご協力いただきました。ほんとうにありがとうございました。



＜講演会当日のあいさつ＞

このたびはチェルノブイリ29周年、福島4周年を迎えての救援コンサート・講演会にいらしていただきましてありがとうございます。いつもご支援をいただき、それをもって活動しております。私個人としましては小学校や、それから中学、そのたった1枚のレントゲン検査をやめさせる運動から始まりまして、チェルノブイリ子ども基金にかかわるようになりました。アメリカのスリーマイル島、それからソ連のチェルノブイリに続いて、日本でも原発事故が起きてしまいました。日本でも原発事故が起きると予想はしていたのですが、まさか現実化するとは思いませんでした。もうすでに4年たちました。チェルノブイリのほうも29年たってやっとセシウムの半減期30年にさしかかっていますが、まだまだ問題は解決されていません。チェルノブイリの救援の経験を生かしまして、ひとつは福島の子どものための救援、特に甲状腺の検査、そして沖縄に球美の里という保養所をつくって避難できない子どもたちが年に1回は保養できるようにということで活動してまいりました。そしてこの4月からはストロンチウムというベータ線を測定するラボを、私たちが支援している市民放射能測定室「たらちね」が立ち上げました。これは国が測定しても公開していないという非常に問題なのですが、それを民間の私たちが測定できるようになりました。それも皆様方のご支援の賜と思っております。これからも福島事故の処理は長く続くと思います。もう甲状腺がんはみつかっております。しかしそれに続いて3年後からはもう大人も子どもも発症する白血病というのが表面化されていません。現実にはでているようです。それからあと6年もたてば大人のがんが多発してくると思います。そういう問題を抱えております。チェルノブイリの救援と合わせまして、今後とも末永くご支援をお願いします。

「チェルノブイリ子ども基金」顧問
「未来の福島こども基金」代表・小児科医
黒部信一

イベント終了後、出演者のみなさん、ボランティアのみなさん、子ども基金スタッフとホールの前で。

◆「原発事故後の課題」

低線量被ばくを長期にわたって受け続けると、内部被ばくが慢性化していきます。その被ばくから子どもたちを守るにはどうしたらいいのか、一緒に考えていきたいと思います。

福島原発事故から4年経っても、私たちがどれだけ放射能汚染の被害を受けたのか、その実態ははっきりしていません。知らされないままに、4年が経ってしまいました。低線量被ばくを長期にわたって受け続け、内部被ばくが慢性化していく——これは、事故後を生きる私たちの課題です。チェルノブイリの場合と同じです。長年にわたって汚染地に住み続けることによって、外から放射性物質を身体に取り込み内部被ばくする。それを長く続けることによって病気が出てくる、というメカニズムです。

事故から4年経って、放射線の空間線量も下がったのだから、もういいだろうという声があります。しかし、これは被ばくに対する考え方の基本がない状態だと、私は考えます。例えばコップを想像してみます。1年目に注ぎ込まれる放射能、2年目に注ぎ込まれる放射能——、コップはだんだんと一杯になり、溢れてこぼれたときに、病気のリスクが形となって表れてきます。だから、私たちはできるだけ被ばくしないように、厳しく心構えて生きていくしかありません。しかしそれは非常に難しく、なし崩しになっているのが今の状態です。その中で私たちは、子どもたちをどうやって守っていったらいいのか。それが課題です。

今年は阪神淡路大震災の20周年にあたります。神戸で、京都大学を退官された小出裕章さんと、シンポジウムでお話しさせていただきました。小出さんが、ご自身で作られたパワーポイントを使っていいとくださったので、それを使ってお話します。

◆図：広島原爆で大気中に放出されたセシウム137の量（ベクレル）は、 8.9×10^{13} 乗。福島第一原発の事故では、 5.9×10^{14} 乗でした。2号機は爆発しませんでした、ものすごい量を放出していて、それに3号機をあわせると、大気中だけで、広島原爆の168発分のセシウム137（3.11直後のデータ）が

放出されました。ところが東電は、海外メディアに対しては470発分と発表していました。この4年間、放射性物質は原発から出続けています。止まっていません。つい最近も、2号機の周辺の放射性線量の値が高くなったので、建屋の中を観察しようとロボット2台を内部に入れましたが、線量があまりに高く、基盤部分が汚染されてコントロール不能となり、いまも回収できていない状態です。4年間をあわせると、この図よりもっと多くの放射性物質が放出されています。

◆どれだけの国土がどれだけの汚染を受けたのか？汚染地図の作成は不可欠です。空間線量だけではだめです。SPEEDIはシミュレーションですが、この数値に関しては、文科省も認めています。

◆文科省が作った福島の汚染地図です。汚染地図を把握することはとても大事です。セシウム137の放射能汚染のレベルです。日本の法律では、1平方メートルあたり4万ベクレルを超える場所——放射線管理区域——に、16歳以下は立ち入ることができませんし、その中で飲食をすることも、寝泊まりすることもできません。法律に従えば、色が塗られているところ全体が、その4万ベクレルを超えていますので、この地域に人は住めません。事故後、避難勧告はまず、原発から半径5キロ圏内の人々に出されました。5キロ、10キロ、20キロ圏内と、その範囲は広がっていきましたが、政府はいま、この20キロ圏を避難解除して、家に戻るように言っていて、戻らざるを得ない人たちが出てきています。

◆＜日本の汚染地図＞このブルーの地域もやはり、放射線管理区域の線量レベルを超えています。福島県の東半分を中心に、宮城県と茨城県の南部・北部、さらに、栃木県と群馬県の北半分。千葉県の北部、岩手県、新潟県、埼玉県と東京都の一部地域が、放射線管理区域にしなければならないほどに汚染されました。これだけの広範囲に及ぶ汚染があり、子どもたちが被ばくをしている。これは事実です。しかし、そういうことを言うと、いまの日本社会では、「風評被害」と言われるといった、少し不思議な現象が起きています。

日本政府は、かつての放射線管理区域のルールを無視しています。ICRP（国際放射線防護委員会）は、これ以上は被ばくしてはならないという基準を、年間あたり 1 ミリシーベルトと定めています。日本は事故の後、その基準を 20 ミリシーベルトに上げてしまい、しかも土壤汚染を考慮せず、空間線量のみで判断するようなことをしています。

福島に行くと、駅前などに、オフィシャルのモニタリングポストが立っています。ところが、その周りには高圧洗浄機で除染していますので、それが表示する線量は非常に低い。少し離れると、また高くなる。国は、その一番低い値の空間線量でもって、大丈夫、と言っている。子どもだましのようですが、それが数字として一人歩きしていきます。福島ではテレビの天気予報を見ていると、空間線量も同時に表示されます。それが全部ものすごく低い値なんですね。だけど、福島の人たちは、その数字が実際より低く示されているということを知っています。それが、いつも以上に高くなったら気をつけよう、その程度の目安にしているに過ぎません。

こうして、空間線量の値がニュースで報じられているのは福島県だけですが、福島県以外の子どもたち、宮城県と茨城県の南部・北部、さらに、栃木県と群馬県の北半分。千葉県の北部、岩手県、新潟県、埼玉県と東京都の一部地域も、福島県の子どもたちと同様のリスクを抱えていますので、本来はこういったところでも知らされてしかるべきです。群馬県は県全体で、広島型原爆 1 発分と同様のセシウムが降り注いだと計算されていますので、群馬の子どもたちも、甲状腺がん他のさまざまなリスクは増加しているはずです。

◆＜土壤汚染の地図＞千葉県の松戸です。常総生協が空間線量と土壤汚染を測りました。黄色で塗られたところ以外は、4 万ベクレル以上の汚染がある地域です。しかし、この千葉県で放射線防護の対策がとられているかといったら、とられていません。北関東には、意外にホットスポットがあつたりしますので、要注意です。放射線防護の対策をとらなければならないのに、抜け落ちています。ですので、福島、福島、と言うと、まるで汚染は福島にしかないように思えてしまいますので、これはよくないと思っています。

ます。

◆図：「東北地方、関東地方の広大な大地に降り積もったセシウム 137 の放射線量（沢野伸浩さん＜清涼女子短期大学＞の評価）」

『小さき声のカノン』では、ベラルーシ、ウクライナ、福島取材しました。土壤汚染は非常に重要ですので、映画のなかにもそのマップを入れたいと考えて、協力してくれそうな専門家を探しました。最初、気象庁の専門家の方にお話ししようとしたのですが、ところが、その方が学会で土壤汚染について発表しようとしたら、気象庁が彼のことをクビにしようとしたということがありました。土壤汚染に関しては、非常にガードが固くなっていて、専門家がそれを研究テーマとして、情報を出して発表するというのがなかなかできない状況です。そんな中で、沢野さんが、地図を提供してくれました。

◆沢野さんの計算によると、 2.4×10 の 15 乗ベクレル。重量にして、たったの 750 g が降り注いだけで、あれだけの汚染が起きました。それが何を意味しているかといったら、つまり、放射性物質というものが、いかに猛毒であるかということです。プルトニウムは何百万分の 1 グラムでも肺に吸着すると、非常に高い確率で肺がんになる。それぐらい毒性が強いものです。たったの 750g、これでも十分な汚染を引き起こすだけの、地球上でもっとも毒性の強い物質です。それが 300 年も、あるいはプルトニウムだったら、1 万 2000 年かかっても、たかだか半分にもならないような猛毒が、放出されてしまったということです。放射能は五感で感じることはできません。想像できないわずかな重量でも、十分に強い放射線を出すということです。

◆チェルノブイリ原発からヨーロッパに、放射能がどのように降り注いだかを示した地図です。放射能はトルコにもたくさん降り注ぎ、トルコのシノップという町にも、チェルノブイリから出た放射能のホットスポットができています。住民は皆、いろいろな病気特にがんが多く発症しているということを知っているといいです。トルコでは汚染地図が公表されていませんが、がんの死亡率が高いということは、口コミで広がっています。事故から 29 年経ち、チェルノブイリから放射性物質が、トルコのあちこちにホッ

トスポットをつくっているということ、シノップという町にはホットスポットがあって、いろいろな病気、とくにがんが出ていることを、みんな知っているそうです。情報というのは、時と共に見えるようになってくるのですね。

◆空間線量だけではダメで、土壤汚染をすべての基準にすることが大事です。日本も、土壤汚染地図を作成して公開し、それを基準に放射線防護対策をとらなければなりません。このベラルーシの土壤汚染地図をつくったのは非常事態省ですが、その役人にインタビューをしたら、この地図は誰でも手に入れることができると言っていました。確かにあちこち取材をしていると、学校にも役場にも、普通の人は家にも貼ってあったりもします。自分たちがどれくらい汚染されたところに住んでいるのかを、皆、把握しています。目で見てわかる。それを基準に、国家も住民も、放射線防護の対策をとる。こういった元になるものをなくして、いかなる放射線防護対策もたてることはできない。それが、ベラルーシ非常事態省の意見でした。日本はどこを見ているか。ちょっとずれていますよね。ごまかした空間線量を公式なものとして、年間被曝線量限度を1ミリシーベルトから20ミリにまで上げ・・・。

◆被ばく対策に関して、日本と、ベラルーシ・ウクライナの違いを見てみます。ベラルーシもウクライナも、年間5ミリシーベルト以上は強制避難の地域です。日本は、年間20ミリ以上ですね。選択避難という枠もあり、1ミリから5ミリの間は、そこに留まることもできるし、他へ避難することもできる。避難するのであれば、移住費用は国が負担し、新しい住居を用意し、仕事も斡旋します。残るのであれば、また、いろいろな放射線防護対策が施されます。

汚染地域の範囲というのは、空間線量で年間0.5ミリシーベルト以上のところを指しますが、それには内部被ばくも考慮して、外からの被ばくは1ミリの半分に抑えるという、厳しい考え方をしています。

ベラルーシの場合、汚染地に住んでいて病気になる可能性があるということで、年間170万人が無料で健康診断を受けています。日本ではいま、甲状腺がんのみを対象としていて、機能低下などについては一切考慮していません。その対象は36万人で、

実際に受けているのは30万人です。

医療費は、ベラルーシとウクライナでは無料（注1）ですが、福島県は18歳以下のみ無料で、その他は保険診療です。18歳を超えて甲状腺がんを発症すると大変です。子どもの保養は、ベラルーシ・ウクライナでは国営のサナトリウムを建設し、年に1回、約1ヶ月間、子どもたちを保養させています（注2）。それは国家予算で行っていますが、日本の場合は民間のボランティアに頼っています。給食は安全な食材を提供しています（注3）。一方、福島は地産地消で、福島の米を食べなさいと言っています。いわき市のお母さんたちが市と協議をしていましたが、ついこの間、押し切られてしまって、いま福島県すべての給食で、福島県産米が使われているという状況です。リクビダートルとは、原発事故後、まだひどい状況の時に収束にあたった労働者のことですが、彼らには住居、高額の年金、無料の医療が生涯保障されています。日本の場合は多層下請構造で、東京電力は、労働者の名前すら把握していないと言っています。

日本とベラルーシ・ウクライナの対応の差が、これだけあるということを分かってほしい。日本は本当にひどい、やるべきことをやっていません。

◆この4年間、避難の権利を認めないという国の政策が、地域と人間関係の分断を促進しました。被害を受けた人たちが踏みにじられていく。保障はなく、線量が高くても避難する権利を認めてもらえない。そしてそのことに声をあげるとたたかれる。

◆＜映像：渡利地区＞JRの福島駅から車で5分かからないところです。「美味しんぼ」に登場し、激しくバッシングにされてしまった、福島大学の准教授荒木田岳さんです。荒木田さんは家を建てる予定で、土地を購入していた。毎時1マイクロシーベルトを超える線量。土手の土壤汚染は43万ベクレル/kg、空間線量、毎時1.2μシーベルト。「本来、避難指示を拡大しなければいけないところなのに、基準を変える事によって、人が住めるということにしまった。法治国家がやってはいけないことだと思います。僕が一番強調したいのは、そこです」「除染しても、福島に人は住めるようにはならない」と発言して、激しいバッシングにされてしまった。僕は、

福島の人とこの状況を足下からどう変えていくかということに関心があるので、内輪で感情的な対立とかにはなりたくないの、ああいう書き方はしないで、アシスタントの人にかなりしつこくお願いしましたけど、それが受け入れられず、そのまま載ってしまった」 約 600 件の抗議が来た。「今後起こってくることを考えると、それだけシビアになってくる。今回のこういう反応は予想できました」「チェルノブイリ、スリーマイルでとった対策すら、日本ではやっていません」「マスクすらしないで、通学路にて、この土手を通っています。ひどいことです。最初の頃は注意していたけれど、普通のことで、もう・・・」

事故当時、福島大学ではバスを出して学生たちを避難させようという提案がありました。ところが、後に学長になられた、当時副学長の清水さんはバスを断り、避難しないということになりました。大学の敷地内は非常に線量が高かったのに、学生たちは、そのままでした。荒木田さんの家族は、荒木田さんだけを福島に残して新潟に避難しています。渡利に家を建てようと土地を購入していましたが、事故が起き、しかも汚染がひどいのでそのままになっています。ところが評価額がそんなに下がっておらず、固定資産税を請求されたのを払わないでいたら、瞬く間に差し押さえられました。とても理不尽なことが起きています。

◆＜映像「カマレポ」＞福島の若い女の子たちが、どんなことを考えているのか。女の子が、「妊娠したりしたらリアルに考えられるのではないかな」と言っていました。でも被ばくのリテラシーから考えたら、妊娠した時点で、身体の中に放射性物質がたまっていたらマズいですね。計画的に妊娠できるわけでもないし。妊娠したときに、身体の中に放射性物質が残っている状態が想像できない。そういう情報もないし、想像できない。これくらいだったら大丈夫という、安全基準値を信じて、食べている。放射線の確率論と似ています。全員が弾に当たるわけではなく、外れるものもあれば、でもそのうちの何発かは当たる。事故が起こる前は、10 万に 2～3 人の子どもが、宇宙からの放射線に当たって、非常にまれに白血病になっていました。でも今は白血病

にかかる子どもがずっと多くいるので、弾がいっぱい降っているイメージです。放射線の教育はとても大切です。そんな中、実際に妊娠した女性がいます。避難した方がいいのではないかと、思った途端に、罪悪感を感じるようになる。

福島の中で何が起きているのか、伝わりきっていないと思っています。福島に住んでいる人たちが、どういう思いで福島に留まり、暮らしを続けているのか。一人一人の声がメディアを通して、日本中の人に伝わりきっていませんし、なんだかとても大切なことが、抜け落ちている気がします。

◆この 4 年間で、事態はますます複雑になっています。福島から避難せずに、そのまま留まっている人たちの中から、外からあれこれ言われたくないという声が出てきています。「そんなところに住んでいて、バカじゃないのか」など、ひどいことを言われて傷ついています。映像の中で高校生が言っていたように、「福島の子とは結婚できないよな～」とか、冗談交じりに言われています。自分たちだけでやっていける。福島は復興しているのだ。放射能の汚染はあっても、影響は少ない。住み続ける以上、それが日常なのだから、放射能について考え続けることは難しい。こういった思考が、定着してしまったような気がします。このような状況のなかで、子どもたちを保養に出すということが、非常に難しくなっています。「保養」という言葉そのものが、福島では禁句のような扱いです。保養に出すということは、つまり、そこに放射能のリスクがあるということを確認することで、これはとても大きな壁になっています。＜講演録より抜粋。後半部分は次号に掲載します。＞

※鎌仲さんが講演で使用されたパワーポイント画像は、後日、子ども基金のホームページに掲載します。

※子ども基金の見解：【注 1・2】チェルノブイリ被災国の医療費と保養費について、詳しくは 7～9 頁をご覧ください。【注 3】ベラルーシでは現在、学校給食の食材を専門に扱う組織が、店や市場、農場などから食材をまとめて購入しているそうです。しかし子ども基金が支援しているゴメリの団体の代表者は、「これらの食材の安全性は誰にも確認できない」と言います。

ゴメリ市、モーズィリ市、ミンスク市に住んでいる里子の家族を訪問しました。長い間支援を受けている里子、新たに支援を受ける里子、そして、あまりに短い生涯を閉じた里子のお墓参りにも行きました。今号ではゴメリ市の里子の一人を紹介します。

~~~~~

サーシャ・K 1998 年生まれ ゴメリ市

2006 年に膀胱がんの手術。2010 年に再発し再手術。チェルノブイリ事故が原因による障害児と認定されている。母親の話。「息子は膀胱がんが見つかって以来、治療が終わったと思うとまた悪くなり入院。今、膀胱がんは小康状態を保っていますが、他の問題が起きてきています。昨年 11 月にも体調が悪くなり入院しました。2 か月に 1 度は検査を受けに行きます。何度かの化学療法の後、片方の腎臓の機能が働かなくなりました。その他、高血圧、背中の痛み、骨そしょう症、心臓の異常もあります。病院での治療は無料ですが、自費で購入している薬もあります。薬代は、その時の症状によってですが、1 か月に 100 ドルくらい。カルシウム剤も買っています。病院で処方されるベラルーシ製の薬は無料です

があまり効果がないため、高価な外国製の薬を買っています。かかりつけのミンスクの病院での検査は無料ですが、体調が急に悪くなり、急いで検査してほしい時、今の薬のま

までよいのかどうかすぐに知りたい時に、定期検査の予定が数か月先であれば、ゴメリの病院で検査をしてもらいます。するとその検査費用は有料なのです。定期検査と治療のため、自宅と病院を行き来する生活です。体力は落ち、食欲があまり



ありません。それでも息子はとても我慢強く、少しでも体を鍛えようと、筋力トレーニングをしたり、体に負担の少ない運動などをしたり、いつも努力しています。通学はできませんので先生が自宅に来て授業をします。よく勉強もしています。自分の息子ながら、本当によく耐えている、この心の強さがあるなら大丈夫、きっとよくなる、と思っています」

サーシャの成績はほとんど 8 か 9 (10 段階評価) で、英語は 10。物理や数学が好きで、将来の夢はプログラミストになることです。食事制限はありませんが、脂っぽいものは好きではないとのこと。他には何か好きな食べ物は? と聞くと、「母の手料理なら、なんでも好きです」と答えました。物静かな性格で、緊張するとどもってしまいます。また長い間座っていると背中が痛くなるようで、時々椅子から立ち上がらなければなりません。母親は市内の小児リハビリセンターで保育士をしていますが、9 月に閉鎖されるという噂があるそうです。家族の住んでいる地区には、新たな集合住宅

がものすごい勢いで建設されていて、住民数が激増しています。一方、幼稚園や小児病院が足りず、この地区の病院はどこも患者であふれているそうです。そのため、リハビリセンターを閉鎖し、その建物の半分を幼稚園、半分を病院にするという

計画があるのだそうです。「職場が閉鎖されて人員削減にあったらどうしよう。幼稚園にするなら、そこでなんとか雇ってもらえないか、とハラハラしている」と話しました。父親は背骨の病気で建設業の仕事を失い、今は胆石も患っています。

## ベラルーシ・ウクライナの保養について

福島原発事故後、日本から訪問団やマスコミなどがベラルーシやウクライナの被災地を多く訪れるようになり、「現地では保養を含めた子どもの健康対策が十分になされている」ととられるような内容の報告も見受けられます。ただ、長年チェルノブイリ被災者の支援を続け、現地の実情や人々の本音に触れることの多い私たちには、疑問や戸惑いを感じる部分もあります。以前、このニューズレターで「モスクワ便り」を執筆し、現地事情に詳しい平野さんに、保養について原稿を寄せていただきました。

日本では福島第1原発事故後、「沖縄・球美の里」などの取組みを通じて、原発事故被災者の「保養」という考えが少しずつ広まってきました。チェルノブイリ子ども基金では、原発事故で被災した子どもたちやその家族の保養を20年余り支援していますが、チェルノブイリ被災地での保養支援の経緯についてご存知でない方も増えてきたようですので、簡単に説明しておきたいと思います。

被災国の保養制度は、全てが原発事故後に作られた制度という訳ではありません。旧ソ連では、すでに戦前から「ピオネール・キャンプ」という、夏休みを中心に子どもたちに集団生活を教えるための制度が広まっており、原発事故前には各地に施設が整備されていました。キャンプといってもテントを張って野外生活をするのではなく、専用の施設で教育の一環として行われるもので、日本の林間・臨海学校が、専用施設を使ってより大規模に行われるという様子を想像していただければよいと思います。当時のソ連では、共働きの両親の負担を減らすためという実質的な目的と、軍事教練や子どもは最終的に国家が養育するというイデオロギイ的な目的とのために、こうしたキャンプが広められました。1980年代には全国に4万近い施設があり、年間約1千万人の子どもが滞在したといわれます。また同時に、労働組合などが管理する保養所も各地に整備され、職場を通じて支給されるクーポン券を利用して家族などで休暇を過ごすという制度も広く普及していました。

チェルノブイリ原発事故後の保養制度は、こうしたソ連の「遺産」を有効利用する形で作られてい

ます（最初にこの制度が原発事故の被災者に転用されたのは、ベラルーシで夏休みを前倒しし、子どもたちを「疎開」させるためでした）。ソ連崩壊後、キャンプの多くが閉鎖されましたが、一部が有料の宿泊施設として、またベラルーシやウクライナでは、チェルノブイリ被災者のために名目とした保養施設として国家予算を得ることで生き残っています。

これに対して、子ども基金が支援を続けているベラルーシの「希望」は、場所の選定から始まって、最初からチェルノブイリ被災者支援を目的として作られた施設であるという大きな違いがあります。また、日独などの各国NGOが積極的に関わることもあって、現地スタッフも被災者のために働き、子どもたちの自主性や創造性を重んじるプロたちが集まっています。前述の通り、チェルノブイリの保養制度の土台となった「キャンプ」にはもともと集団主義的な性格もあり、制度を支える大人たちの志や不断の努力、保養制度の肯定的・否定的な両面と限界を踏まえた専門的知識や技能というものがとりわけ重要です（「沖縄・球美の里」も、「希望」の理念を受け継ぐ形で設立されました）。強権的な政治体制が批判されることの多いベラルーシで、こうしたソ連崩壊直後の民主的で自立的な雰囲気の中で生まれた組織を維持するには特に努力が求められます。「希望」を支援し続けることは、この施設の維持に腐心する現地の人々を支え、その理念に共鳴を示すものであり、単に被災者を支援するという以上の意味があると考えます。

いわゆる「チェルノブイリ法」に代表される被災者支援制度についても注意が必要です。多くは、崩壊前後の民主化要求が高まる中でまとめられ、実情と乖離している点も多々あります。文面だけ、宣伝される一部だけを見て素晴らしいということは残念ながら出来ません。保養を例にとっても、学校単位の「保養」が公的な予算で大々的に行われているのに対し、病気の子どもや治療を受けた人など、本来優先的に保養の必要性が高い人の保養が、子ども基金のようなNGOの支援に頼って行われているという現実があります。そもそも



「チェルノブイリ法」に定められた被災者の権利が全て満たされているのであれば、子ども基金の活動も必要なくなっているはずなのです。

もちろん、チェルノブイリの被災者対策には参考すべき点も多くありますが、それらも様々な特有の社会的・歴史的背景があって築かれてきたものであり、不十分な点も数多くあるということは認識しておいた方が良いでしょう。放射能災害の支援には、どこかに決まった答えはなく（そもそも被害の範囲すら線を引くことが難しい）、保養を含め、日本では日本に合ったよりよい方法を悩みながら、それぞれの場で築き上げていくより他ないのではないのでしょうか。

＊一般的に「保養」の訳で使われるロシア語 *ozdorovlenie* には、（心身の）健康増進や健全化という意味があります。

＊ソビエト時代のベラルーシのキャンプの様子

<https://www.youtube.com/watch?v=BHXL3mZ-E>

（平野 進一郎）

<子ども基金事務局からの補足>

～ ベラルーシの保養と医療費について ～

（１）国家予算で行われている汚染地区の子どもの保養は、保養権利のある子どもの全員に対して行われているわけではありません。以下は、「希望」から得たデータです。①保養の権利をもつ子どもの人数 ② 実際に保養をした子どもの人数 ③保養をした子どもの割合

|      | ①       | ②       | ③ %  |
|------|---------|---------|------|
| 1993 | 475,294 | 211,981 | 44.6 |
| 1997 | 452,308 | 218,465 | 48.3 |
| 2001 | 405,926 | 229,883 | 56.7 |
| 2005 | 275,196 | 177,011 | 64.3 |
| 2009 | 174,418 | 115,003 | 65.9 |
| 2012 | 158,102 | 102,300 | 64.5 |

③は1993年より増えていますが、一方で①の人数が減っています。以前は“汚染地区”とされていたところが、何年か経過して汚染地区から外されれば、その分、保養の権利を持つ子どもの人数は減ります。実際に汚染の度合いが低くなっているところもあれば、国の経済的負担を減らすため

にあえて汚染地区から外している、ということもあるかもしれません（子ども基金が支援している人たちに聞いた範囲では、後者の理由を挙げる人が多いです）。また、国の予算で足りない部分は、各保養所が自助努力をして運営しています。例えば「希望」は、自分たちで外国NGOのパートナーを見つけて支援を得たり（子ども基金もそのひとつです）、一般の保養客を受け入れることで収入の一部にしたり、敷地内の農園の野菜を使うことで経費を少なくしたりしています。

しかし100%ではないにしても、国の予算でいまだに保養が行われているのは、子どもの健康を守ろうという姿勢が見える気がします。

（２）住民の健康診断は無料、甲状腺がんの手術費用は無料です。しかしすべての病気の治療費が無料というわけではなく、医薬品を自費で購入しなければならない場合もあります（7頁もご覧ください）。甲状腺手術後の患者が服用するチロキシンというホルモン剤は、ベラルーシ製のものは無料で処方されますが、体質に合わない人が多く、子ども基金は長年、ドイツ製のチロキシンの購入費用を支援しています。また、カルシウム不足に陥る人が多く、それを補うためのカルシウム剤も支援しています。

以下は、子ども基金が長年支援している、ベラルーシ・ゴメリ市にある慈善団体「困難の中の子どもたちへ希望を」の会員（5～17歳）の病気の内訳です。

| 診断名              | 人数 | 診断名          | 人数 |
|------------------|----|--------------|----|
| 白血病、血液病          | 37 | 副腎腺腫         | 3  |
| 脳腫瘍              | 30 | 血管腫          | 3  |
| 小骨盤の腫瘍           | 25 | 先天性腎臓奇形      | 3  |
| 目の腫瘍             | 17 | 皮膚がん         | 2  |
| 腎臓がん             | 14 | 染色体疾患        | 2  |
| 肝臓がん             | 12 | 甲状腺腫、結節性甲状腺腫 | 2  |
| 甲状腺がん            | 12 | 成長障害         | 1  |
| 鼻咽頭のがん           | 6  | 脈管発達異常       | 1  |
| 神経芽細胞腫、縦隔神経節性神経腫 |    |              | 4  |

これは2014年11月時点での数字です。新たな会員は今も増えているといいます。



## 里親のページ

「自分には関係がないと思われる不幸な出来事に対し忸怩たること」 坂本 新

2004年8月から2007年3月まで、私はロシアのモスクワに駐在していました。この駐在を通し、ロシアや近隣諸国に魅了された私は、いつかどこかで、ロシアはじめ、その近隣諸国のために何かをしたいと思うようになりましたが、チェルノブイリ子ども基金と出会ったことで、その思いが遂げられました。

モスクワ離任後、私は中国の北京に赴任しましたが、北京駐在中の2011年11月、査証更新のために一時帰国した際、チェルノブイリ原発事故の特集が掲載されていた雑誌「DAYS JAPAN」のバックナンバーを購入しました。その中にチェルノブイリ子ども基金の名前が記載されていたのです。恥ずかしながら、チェルノブイリ原発事故の詳細を知らなかった私は、改めて本事故を調べる中、「チェルノブイリ・ハート」というドキュメンタリー映画の存在と、この映画が今まさに上映中であることを知り、即日、観に行きました。そして、その映像にたじろぎ、打ちのめされました。ホテルに戻ってから心が落ち着かず、自分にできることは何かを考えました。そして、知ったばかりのチェルノブイリ子ども基金を直接訪ね、どのような支援の方法があるかを伺いました。その帰途、さらに情報を集めようと書店に立ち寄ったところ、今度は映画「カーリーナの林檎」の上映情報が目に付きました。これも翌日からの上映。あまりのタイミングの良さを訝しく思いつつ、観に行きました。そして、やるせない気持ち一杯で映画館を後にしました。

一週間に満たない一時帰国の間に、これらのことが立て続けに起き、チェルノブイリ子ども基金へ里親の申請をさせていただきました。

私にはこの問題を抜本的に解決することはできません。私にできることは、本当にささやかな支援だけです。それでもその支援の先に、繋がる命や希望があるのであれば、里親となる機会をいただけたことに感謝しつつ、困難の中にある人々を想い、可能な限り、この支援を続けて行きたいと願うのです。

### \* 里親募集のお知らせ \*

G・エフゲーニ (5歳、男の子)  
ベラルーシ ゴメリ州ブラーギン地区ウグレイ村



右腎臓芽細胞腫。2014年4月に手術。現在は化学療法を受けている。家族の暮らしている村は放射線による汚染地区。母親はチェルノブイリ事故被害者証明書を持っている。家計は大変厳しい。

里子への支援として、ひと月50ドル相当を2年間ご支援いただける方を募集しています。詳しくは事務局にお尋ねください。資料をお送りします。

~~~~~

ウクライナもベラルーシも、公共料金の値上がり、物価高騰、職場の人員削減などの影響で、病気の子どもをもつ家庭の経済状況は一層厳しくなっています。子どもの頃からチェルノブイリ事故による障害児と認定されているウクライナの20歳の青年は、腎機能不全のため血液透析を受けています。薬代、通院代などが重い負担になっているといいます。「僕は生き続けたい。でもこの国では、自分の病気のことなど自分で何とかしろ、と見捨てられたようなもの」と訴えています。

ふ く し ま 便 り

子ども脱被ばく裁判

5/23 デモ前 4 分スピーチ

関東ネット 木本さゆり

こんにちは！「放射能から子どもを守ろう関東ネット」の共同代表をしています、木本さゆりと申します。関東ホットスポットの、千葉県松戸市から参りました、6歳と14歳の子どもの母親です。

私達は、年間1msvの公衆被曝限度を超える、「汚染状況重点調査地域」の市民が行った土壤汚染調査をきっかけに、子育て世代が中心になって立ち上げたネットワークです。現在、栃木、茨城、千葉、埼玉の、約40団体が加盟しています。子ども達を守りたい気持ちに、県の境はありません。私たちが声を上げる事が、福島の子ども達を守ることに繋がると確信して、行動してきました。

私たちは、原発事故子ども・被災者支援法が定める健康支援を、関東でも適用してもらえよう、環境省や文科省、復興庁に求める交渉を、これまでに9回行ってきました。しかし、その要望は、非科学的根拠によって退けられてきました。

支援法に基づいて環境省が設置した、専門家会議も、1年3ヶ月にわたって傍聴してきましたが、国は、福島の子どもの甲状腺がんすら「被曝の影響ではない」として、実際の子ども達の健康状態に向き合うことをしていません。「不安の解消」はリスクコミュニケーションによって行う、などという責任放棄を押し通そうとしています。私たちは、これをなおざりにしてはいけません。

国が動かない中、関東では「関東子ども健康調査支援基金」が設立され、市民による甲状腺検査が始まっています。検査費用の助成を行う自治体も出てきました。でも、国が指定した「汚染状況重点調査地域」は、福島県内はもちろん、岩手、宮城、茨城、千葉、埼玉の、102の市町村にのびります。セシウム137は半減期が30年です。これから長きにわたって、多くの住民が被曝と向

き合わねばならない現実にあります。また、土壤に沈着しなくても、爆発後の高濃度の放射性ヨウ素を含んだ放射性の雲、プルームは、関東全域を蹂躪したのです。静岡のお茶にヨウ素が付着したのですから、関東全域の住民が、呼吸を通して、ヨウ素による被曝をしてしまったことは、想像に難くありません。

今は元気でも、被曝の影響は、すぐにでるとは限りません。5年後、10年後、甲状腺がんのみならず、様々な病気を引き起こすことが、チェルノブイリの経験からわかっています。それがとても恐ろしいところだと思います。

被ばくの問題は、福島だけの問題ではありません。私達、関東の問題でもあるのです。再稼働ということになり、事故が起きれば、日本中のみなさんの問題なのです。

何の責任もない子どもたちに、無用な被ばくをさせてしまって本当に申し訳ないという気持ちから、大人として責任を取らねばなりません。事故は起きてしまったけれど、私たちは全力で子どもを守るのだ、ということを子ども達に伝えたい。

再稼働させる前に、今、高い放射線の中に生活している福島の子どもたちの避難の権利、国と県の責任を問うべきです！

どうか皆さん、気持ちを寄せ、共に訴えて参りましょう！！

=====

5/23、午後1時から東京・新宿アルタ前にて『「子ども脱被ばく裁判」放射能汚染地の全ての子どもたちの命と健康を守ろう！5.23新宿デモ』が行われ、約250名が参加し、沢山の市民の注目をあびながら新宿の繁華街を「子どもを放射能から守ろう！」「避難の権利を保障しろ！」と訴えてデモ行進しました。



チェルノブイリ事故から 29 年 ベラルーシの TV 報道

チェルノブイリ事故から 29 年目となる今年 4 月、被災国のひとつであるベラルーシで報道されたチェルノブイリ関連のテレビ報道の一部をご紹介します。ご存知の方も多いと思いますが、ベラルーシで行われる各種メディアによる公式の報道は、おおむね国家の意思を反映したものとなっています。ベラルーシでは現在、国内初となる原子力発電所の建設が、2018 年の稼働をめざして進められています。以下ご紹介する番組の内容も、この一大国家プロジェクトの進行を背景としています。

(事務局)~~~~~

ベラルーシの主要全国放送「STV（首都テレビ）」

討論番組『何が起きているのか？』

4 月から始まったこの番組では、発生から 29 年経過したチェルノブイリ原発事故をテーマにスタジオのゲストらが討論を行った。「現在ベラルーシでチェルノブイリへの恐怖心は残っているか？」「ベラルーシは事故の影響に対処することができたのか？」というのが、番組が答えを求めた質問である。

「30 年間で放射能汚染地は 3 分の 2 になっているというが、これはどうしてか？」という司会者からゲストの専門家に向けられた質問には、以下のような説明があった。放射性物質の量自体が減っている。汚染物質のセシウムは半減期が近づき半分になっている。経済的な理由もあって土壌の除染は特別実施されなかった。事故当時の汚染地は国土の 23% であったが、現在は 15% となっている（以上、環境学者らの報告）。被災地復興に向けた国家による 5 カ年計画は、現在のもので 5 番目となっているが、初期の「事故処理」「復興」から、現在進めている計画の目標は「持続的な成長への移行」となっている。このことが復興の進展を示している。汚染地に残った人々は復興に向けて努力してきた。これまでと違う環境で生きていく方法を学び、農作物を育て、家を建て、子どもを産み育てている。ベラルーシ国内でも被災地住民への無理解は当初顕著であった。一方で、「チェルノブイリは怖い」というイメージは今でも存在しており、インターネットでは「チェルノブイリ事故の影

響」として奇形の動物の写真が数多く掲載されている（番組スタッフが検索した結果）。これに対し、スタジオの研究者は「こうした例は事故と無関係にみられたもので、事故後の観察でこのような例は見られない」と反論。科学の世界ではこうした現象についての関心も今では低くなっているとのこと。

ゴメリ州ホイニキ地区の役所から招かれたゲストの話では、汚染地区とされる同地区およびその周辺地区でも、農業は復興しており、酪農も盛んである。ゴメリ産の牛乳というと疑いの目をもってみられることが多かったが、この態度は確実に変わってきている。乳製品は何段階かの厳重な検査を経て消費者の手に渡る。この 10 年以上の間、放射能値が高いという理由でホイニキ産の牛乳が検査を通らなかった例は一件もない。ベラルーシの食品基準はロシア、ウクライナに比べて非常に厳しく、製品の多くはロシアに輸出されている。当初はどのようにこれから生活してよいか分からず、住民の生活は困難を極めた。その後、行政の指導を受けながら、作物の種類を変え、食品中の放射能値が低くなる方法を学んできた。また、若者もホイニキでの復興ぶりをみて移住して来るケースもあるなど、人材不足もほとんど無い。

汚染地では、国内の他の地域と異なる健康管理システムがある。年に一度の住民の健康診断が義務となっており、異常があればさらに精密検査を大都市や首都で実施する。こうした体制により、異常の早期発見が可能となっており、その結果、「疾病」として記録される率は他の地域より汚染地の方が低いという結果になっている。また、遺伝上の影響についてもドイツとの共同研究の結果が 2000 年代初めに報告されたが、汚染地住民の間では遺伝的に病気を発症するリスクが高まる、ということは認められなかった。

原発周辺地域の環境観察システムが整備されている。放射線管理地区に設置されたモニターで毎日空気中、土壌、水底などの放射能水準が測定され、上昇がみられた場合はその情報が都市部の管理拠点（モズィリ、ゴメリ、最終的にはミンスクへ）に送られ、分析・調査され、対策を決定するという自動管理システムが機能している。また、住民

の放射能安全教育の面では、スイスとの共同プロジェクトで、汚染地の学校などに「放射線安全文化センター」が設置されている。ここでは子どもたちに自分で放射線のリスクを管理する方法を教えている。子どもたちが得た知識を親に伝えているのだ。

原発を覆っている石棺の耐久年限（30 年）が終わりに近づいている、という指摘についても、一部でささやかれているような「爆発」が起こるということは科学的な観点からあり得ず、上述のような徹底した管理体制によって環境の変化がチェックできるため、大きな懸念には及ばない、と専門家は回答している。チェルノブイリ事故処理を通じて、研究が進み、30 年の間に放射能管理の分野でベラルーシは世界の権威となった。当初は諸外国の支援を受けていたが、今ではベラルーシの経験を学びに欧米や日本からも代表団が訪れるようになっている。国によって環境のモニタリングシステム、食品の品質・検査システムが築かれている。放射線安全対策の面では、「これまで得られた水準を維持することが必須」という目標が国家の大前提となっている。

スタジオのゲスト、会場および番組視聴者からの回答、街頭（ミンスク市およびゴメリ市）の声では、「チェルノブイリ（の影響）が怖い」という声は（食べ物に気をつけている、という人も含め）少数で、国家によって管理体制ができており、何ら心配はしていない、という意見が大半であった。ベラルーシがチェルノブイリ事故の影響に対処することに成功した、という評価はスタジオのゲスト一同が口にした。しかし一方で、チェルノブイリ事故の影響は長期にわたるものであることを忘れてはならず、安心してはいけない。必要な自己防衛の方法はこれからの世代に引き続き教えていかなければならないし、国家も汚染地住民への支援は続けていかなければならない、というコメントも添えられた。（まとめ・翻訳：花田朋子）

<2015 年 4 月 26 日放映：ベラルーシ国営テレビ>
ベラルーシ国内には 12 カ所の特別保養センターと 3 カ所の子どもサナトリウムが展開

ベラルーシでは、小さい頃にチェルノブイリ原発事故で被災した人々や事故後に生まれ、汚染地域に

暮らす人々のためにリハビリ・保養システムが作られている。現在ベラルーシ国内には 12 カ所の特別保養センターと 3 カ所の子どもサナトリウムが展開している。毎年、こうした施設には最大 8 万人の子どもたちが治療や休暇のために訪れている。

そのような施設の中の代表的なものとして、ミンスク州ヴィレイカ地区のサナトリウム・保養複合施設「希望」がある。設立以来 20 年余りの間に、のべ 7 万人を超えるベラルーシの子どもたちが、ここを訪れた。今日（4 月 26 日）、ベラルーシの副首相はこの施設を訪問し、現在滞在中の病気の子どもたちや施設のスタッフたちと歓談した。副首相は、施設の設備や立地環境を視察し、さらに滞在中の子どもたちと交流した。◆**V・マクシンスキー（子どもリハビリ・保養センター「希望」所長）**「このセンターは 1994 年に開設されました。年間を通じて子どもたちを受け入れており、大きなグループやクラス全体という単位で 1 回に 320 人ずつ利用することができます。チェルノブイリ原発事故で特に被害を受けたゴメリ州とモギリョフ州の子どもたちを主に受け入れています。1 年間におよそ 4500 人の子どもたちが保養や治療のために滞在します」◆**N・コチャノヴァ（ベラルーシ共和国副首相）**「ここは、（国内に 12 カ所あるうちの 1 つの）大変優れたセンターです。この施設には、子どもたちの保養やリハビリ、学習のためのあらゆる条件が整えられています。とりわけ重要なのは、子どもたちの学習や生活を支える素晴らしい専門スタッフたちが揃っており、家にいるのと同じような雰囲気を作り上げているということです。彼ら自身が、”ここは私たちの子どもの家だ、みんなの家だ”と言っています」

副首相は、子どもたちと一緒に希望のシンボルとなる木を植えた。これでサナトリウム・保養複合施設「希望」の並木道には、秋に紅葉する檜の木が加わった。この記念植樹（※）はセンターの恒例行事となっている。「希望」を訪れた来賓や支援者たちは、健康に問題を抱えた子どもたちが元気になることを願って、木を植えることになっている。（翻訳：平野進一郎）

（※昨年 9 月「希望」20 周年の際、チェルノブイリ子ども基金も植樹をしました。）



チェルノブイリの歌声 〜 4/24 イベント 来場者の感想 〜

◆4 年たっても「原発事故子ども被災者支援法」が定まらず、避難したくもできないでいる状況に愕然としています。しかも特定避難勧奨地点も解除していく方向です。20msv/year なんて世界から見たら異常です。自主避難をしている方の裁判を支援し、国にも支援法具体化を迫っていきます。「小さき声のカノン」は地元でも自主上映予定です。(50 代女性) ◆印田さんご姉弟の息の合った演奏、よかったです。チェルノブイリでは医療支援を政府が続けてきているのに日本政府のていたらくは何か！と腹立たしい限りです。子どもたちの保養を広く伝えていかなければと強く感じました。(60 代男性) ◆コンサート、本当に良かったです。鎌仲さんのお話、本当に勉強になりました。東京に住んでいるとつい現実から目をそむけてしまう自分がいますが、今日知った事実を頭に叩き込もうと思いました。(30 代女性) ◆年に一度イベントに参加して頭の中をリセットしています。今回写されていたパワーポイントをまた見たいです。まず妻に話したいです。(40 代男性) ◆欺瞞に満ちた政府及び自治体、福島医大の対応に怒りを覚える。国民、県民を守るべき官僚の不作為が目にあまる。子どもたちの保養を積極的に進めなければならないことが良く分かった。(60 代男性) ◆今日の鎌仲さんの説明からも分かるように、日本政府の罪は重い。日本より経済的には厳しいはずのウクライナ、ベラルーシが命に関するという問題意識であろう。日本では情報すら出てこない。鎌仲さんの映像と説明は大変わかりやすく、改めて問題の深刻さを実感するばかりだ。コンサートも新たな曲の発見があってよかった。(40 代男性) ◆文化の力を使うことはとても大事なことだと思う。社会的なことと文化的なことは相反するものではなく繋がっているものだから。文化活動として伝えるということを知り、泣いてしまった。(30 代女性) ◆バイオリンとチェロは曲目が多彩で姉弟の息がよく合っていてとても楽しめた。童謡が洋楽器で弾かれる風合いが面白かった。少し忘れかけていた被ばくが蓄積され続けているという事実、特に福島の理不尽さ。日本とチェルノブイリの国の被害者に対するフォローの差に改めて怒りがわく。何と国民（人間）を大事にしない国なの

か。(60 代) ◆原発事故は決して忘れてはならないと思います。原発をやめても核のゴミは残ります。処分法もなくゴミは増え続けています。その一方で子どもの健康はもっと心配です。保養への協力は続けるつもりです。(60 代) ◆コンサートも鎌仲さんの話も素晴らしかった。保養の重要性を知り、少しでも協力したい。(60 代男性) ◆鎌仲さんの講演は具体性がありわかりやすかった。放射能の問題について多角的な観点から提起されていてよかった。(50 代男性) ◆コンサート良かったです。音楽が心を浄化し、音の波動がみんなの気持ちを 1 つにしてくれることと思います。鎌仲さんのやさしい語り口、「原発反対」も大事なことです。現実として子どもたちを救いたい、守りたいと共感しました。関心のない人に広く見て知ってほしい！と思います。(女性) ◆マスコミの報道が、いかにインチキであるのかよくわかった。地元の人たち同士が対立しているということは、本当の敵が見えなくなることで、安倍政権には好都合。(60 代女性) ◆原発事故から 4 年になるが、もっと放射能に敏感になり注意深く生活しなければいけないし、それを周りの人々に伝え、政府に訴えていきたい。(50 代女性) ◆印田姉弟のコンサートは心が洗われるようでした。鎌仲さんのお話に感動しました。「小さき声のカノン」を観て、今福島で起こっている現実を知りました。出来ることから始めます。(60 代女性) ◆被ばくはチェルノブイリも福島も長く続きます。日本に住む私達全員が取り組み続けましょう。(70 代女性) ◆印田姉弟のアンサンブル、素晴らしかったです。特に魔弾の射手に一票。鎌仲さんのパワポ、シェアしたい。(40 代男性) ◆自分の活動である太神楽でも、文化的な側面からの支援という形で何かしらお役に立てるのでは、と少し希望を感じました。福島をはじめ東北は伝統芸能の宝庫。全国の伝統芸能に関わる方々で繋がりをもち、お互いに支え合い、鍛錬、継続できれば素晴らしいと考えていました。少しずつでも動き出したいです。(男性) ◆4 年経ち危機感が薄れてきていましたが、講演を聞いてそれどころではないと改めて気付かされました。コンサートもとても素敵でした。ありがとうございました。(40 代女性)

募金・救援状況

●募金状況 2015年3月～5月 (単位:円)

	3月	4月	5月
募金件数	90件	175件	59件
救援寄付金	436,521	*1,814,754	134,754
保養費	76,000	184,500	156,000
特別保養費	105,000	35,000	-
里子支援	178,010	12,950	132,400
ニュース購読費	22,000	64,000	24,000
イベント賛同金	42,000	75,000	7,000
合計	859,531	2,186,204	454,154

☆ほかに現物寄付として切手 2,480 円分

* (株) カタログハウス様より運営費としての募金 100 万円を含む

●救援状況 2015年3月～5月 (単位:円)

<ウクライナ>

◎子どもたちの生存

特別保養費 1,207,900

スタッフ給料 (2015 年 1～12 月分) 144,948

事務所家賃、通信費 181,185

<ベラルーシ>

◎困難の中子どもたちへ希望を

緊急支援 2 人 24,242

子どもの保養の列車代 26,243

車修理費 48,484

スタッフ給料 (2015 年 1～6 月分) 145,452

◎チェルノブイリのサイン

里子支援 3 人 (2015 年 1 月～6 月分、1～12 月分、4 月～2016 年 3 月分) 181,815

スタッフ給料 (2015 年 1～12 月分) 7,770

♥ 募金団体名一覧 ♥ (順不同・敬称略)

紙面の都合上個人名は省略させていただいております。ご寄付をいただいたみなさまに心より感謝申し上げます。

【3 月】トランスフェリックマネジメント／東京平和運動センター／カトリック徳田教会／まほろば／北陸学院中学校・高校／「日本と原発」藤沢上映会

【4 月】トランスフェリックマネジメント／小池音楽教室／サカナティヒグチ／(株)カタログハウス／「日本と原発」を自主上映する会 (埼玉県坂戸市)／広河隆一非核・平和写真展開催を支援する会

【5 月】トランスフェリックマネジメント／おはなしのいえ／チェルノブイリ子ども基金・奥羽／ひばりが丘 グレイス教会／日本キリスト教会 横浜長老教会／(株) G-cube

チェルノブイリ29 周年救援キャンペーン 講演会&チャリティコンサート

募金額 313,415円

多くの方にご来場、ご協力いただきましたことを心よりお礼申し上げます。

♥チェルノブイリ子どもへの支援 192,049円

♥福島子どもへの支援※ 121,366円

募金は以上のようにさせていただきました。

収支報告については下記の表をご覧ください。

チェルノブイリ29周年救援キャンペーン 収支報告			
収入		支出	
入場料	379,000	会場費	35,400
賛同金	124,000	舞台費	90,000
会場募金	59,227	印刷費	53,067
物販益	35,916	発送費	99,886
		事務費	3,426
		交通費	2,949
小計	598,143	小計	284,728
		募金	313,415
合計	598,143	合計	598,143

2015年版救援カレンダー

収益 2,351,836 円 (5 月 1 日現在)

多くの皆様のご支援、ご協力に心より御礼申し上げます。上記の内、450,000 円を福島子どもへの支援※といたしました。

※イベント・カレンダー収益とも、福島子どもへの支援は「未来の福島子ども基金」を通して活用されます。《未来の福島子ども基金》

<http://fukushimachildrensfund.org/>

2016 年版救援カレンダー準備中!

2015 年カレンダーの表紙を飾った、広河隆一さん撮影の、ベラルーシのナターシャと二人の子どもの写真は、あたたかい雰囲気が大好評でした。ナターシャは 12 歳で甲状腺がんの手術を受けた後、子ども基金の招待により「希望」で保養、その後母親と一緒に岩手県で保養をしました。彼女は今もその時のことをよく思い出し、懐かしさと感謝の気持ちでいっぱいになる、と話しています。広河さんは、撮影に訪れた病院で、手術を受ける直前の彼女と出会って以来、結婚、出産を経て母親となった今まで、撮影を続けてきました。2016 年カレンダーは彼女のこれまでの生き方を垣間見ることのできる内容です。どうぞご期待ください。完成は 9 月末頃の予定です。詳細が決まりましたらみなさまにご案内をお送りします。

事務局から

■4/24 講演会にご参加のみなさまの感想を 14 頁に掲載していますが、ゲストの印田千裕さんからメッセージをいただきましたのでご紹介します。

「講演を聴きにいらっしゃる方が大半かと思い、どなたでも聴きやすい曲をとプログラムを考えたのですが、お客様のあたたかい雰囲気の中で、私たちも気持ちよく弾かせていただきました。鎌仲さんの講演も大変勉強になりました。鎌仲さんが「文化活動」とおっしゃっていた通り、このような機会をもっと持てたらいいなと思いました。『小さき声のカノン』はいろいろと考えさせられる映画でした。微力ながら、自分に出来ることを少しずつでもやっていけたら良いと思います。今回出演させていただいて、本当にありがとうございました」

■秋の報告会：チェルノブイリ被害児童の夏の保養の様子などを報告します。報告会は 10～11 月頃を予定しています。詳細が決まりましたら HP などに掲載するとともに、ニュース購読者のみなさまにもご案内をお送りいたします。

■チェルノブイリの森林火災：4/29、「チェルノブイリで森林火災」というニュースが流れました。その後の報道によれば、火災はほぼ鎮火、各地の放射線量は基準値以内に収まったとのことでした。「煙がベラルーシ方面に流れている」という報道もあり、心配になり、子ども基金が支援しているゴメリ市の慈善団体代表者のワレンチーナさんに連絡をとったところ、以下の返信がありました。「火災のニュースを恐ろしく感じています。チェルノブイリ事故が起きたときと同じように、私たちは本当のことは知りません。火事が収まることを祈るのみです。放射能値は正常で危険はないとのことですが、なるべく子どもたちを外に出さないように努めます。私たちには平穏というものがなく、いつも心配していなければなりません」その後の先月(5月)末、チェルノブイリ原発から 60 キロほどの、ゴメリ州ホイニキ地区の村に住む里子の家をワレンチーナさんと一緒に訪ねたとき、家族に森林火災の時のことを聞いてみました。母親が、放射能測定所に勤務する知人に聞いたところ、放射能値は通常の 8 倍になった、と話したそうです。そしてそのことは報道されなかったそうです。

■「基金ニュース」について：募金をくださった方には、使途の報告としてニュースレターを発行しています。子ども基金のHPでご覧いただけます。郵送をご希望の場合は購読費・送料(2,000 円/年)です。印刷・発送などの経費の残金は、募金として使わせていただきます。

■ボランティア募集 ◎事務局移転に伴い、子ども基金の紹介パンフレットに住所変更シールを貼る必要があります。平日、事務局でお手伝いいただける方、ご連絡ください。◎ニュース発送作業(年 3 回：3・6・10 月)

次回 日時：10/17(土)午後 1 時～4 時頃まで

場所：東京ボランティア・市民活動センター

(飯田橋駅ビル セントラルプラザ 10 階)

※日程・場所が変更になる場合もありますので、ボランティア参加ご希望の方は、予めご連絡ください。

【問い】平日午前 10 時～午後 5 時 留守の場合は伝言をお願いします。T&F: 03-6767-8808

☆事務局からのお知らせとお願い☆

いつもあたたかいご支援をありがとうございます。振込用紙と領収証につきまして、みなさまにお知らせとお願いです。

すべての方に振込用紙を同封しております

事務作業の都合により、まことに勝手ながらすべての方に郵便払込用紙をお送りしております。決して募金を強要するものではありません。また、すでに通信費・寄付金を納入された方はどうぞご容赦ください。

払込取扱票のお名前・ご住所は楷書でご記入ください
郵便局からは払込取扱票のコピーが届きます。文字がかすれて判読しづらい場合がございますので、楷書でわかりやすくご記入ください。

「受領確認の葉書」をご希望の方へ

通信費・寄付金を納入された方で、受領確認の連絡をご希望の方には、葉書(金額は記載せず)をお送りします。振込用紙の該当欄に印をつけてください。

「領収証」が必要な方へ

郵便局払込取扱票の「払込受領証」は公に認められる領収証です。大切に保管ください。別途領収書がご入り用の際は申し出ください。

●チェルノブイリ子ども基金 NEWS 年 3 回(3・6・10 月)発行●

〒177-0035 東京都練馬区南田中 2-7-7 Tel/Fax 03-6767-8808

E-mail: cherno1986@jcom.zaq.ne.jp

◇ウェブサイト http://homepage2.nifty.com/chernobyl_children/index.html

◇事務局ブログ <http://blog.goo.ne.jp/cherno1986jimukyoku/>

※当基金は任意団体のため、ご寄付は税金控除の対象とはなりません。ご了承ください。